

旅行作家（日本ペンクラブ会員）

清水 武

国際電話の時差からくるギャップ

この夏のリオのオリンピックで、日本からの取材班が東京本社との電話交信の際に直面するかもしれない、ちょっとした困惑——



“エッ 日本は地球の裏側” だって？



「ブラジルは日本の裏側なんかじゃない！」と反発するブラジル人の言い分に理がありそうです。昔、天気予報で使われていた「裏日本側」「表日本側」という表現が変わったように……

「赤道」クイズ……地球をまたぐ

「赤道」の正しい定義は次の4つのどれでしょうか？

「五つの『あ』の原則」とは？

世界で語られている日本人についてのジョーク

定年留学、世界文学紀行でのエピソードから

定年後、スペインのマラガ大学に1年間留学。続いて『ドン・キホーテ』を皮切りに世界文学作品の舞台を訪ねた際の異文化体験<おもしろ文化比較>です。

担当教師をファーストネームで呼ぶ

美人女子大生たちとのキス

「カルメン」の舞台を訪ねてみたが……

「ハボン」の姓を持つスペイン人

「ああ、抱けなかったマドモアゼル！」



時差にまつわるもう一つの、こちらは楽しいエピソード。「レ・ミゼラブル」の舞台フランスを訪れた時のこと——パリジェンヌとの美しくも哀しい出会いの夢物語。

寝ている間に仕事が進む「魔法のマクラ」

自身のホームページに掲載されている英語とスペイン語の記事の翻訳チェックにまつわる裏話です。インターネットがこれだけ発達した時代に、時差を活用した地球的な企業戦略の一端も紹介します。



熟年よ大志を抱け！

身体は老いても心まで枯れてはいけない！ “Seniors, be ambitious!”

プロフィール

早稲田大学卒。NHK学園高校教諭、新聞社海外特派員を経て、定年後にスペインのマラガ大学に留学。43カ国訪問。世界文学紀行で15作品の舞台を訪ねる。現在は海外留学アドバイザー、英語講師、スペイン語講師などを務めている。昭島市社会教育委員



ホームページ：<http://homepage2.nifty.com/donky/>

第1部 ラテン・アメリカでの体験・見聞から**国際電話の時差からくるギャップ**

あと3カ月ほどでリオのオリンピックですね。新聞やテレビの報道を見ていると、国の政治は少々混乱しているようですが「アスタ・マニャーナ」（スペイン語で「明日また」または「明日まで」との意）の生き方のラテン・アメリカではあり得ること。日本のように分・秒まですべてを正確に運営するなんて却って窮屈に感ずる人もいるお国柄です。このへんはまた今日の話の中で触れていきたいと思っています。きっとオリンピックもなんとかまとまってしまうことでしょう。

さて、この夏にはそのリオのオリンピックで多くの特派員や関係者がブラジルを訪れると思います。その人たちの多くが、東京本社と電話交信の最初にちょっと戸惑いを感じずるかもしれません。

特派員だった現役時代の私の体験です。ブラジルですべての取材が終わり原稿をまとめ本社に電話するのは夜の10時頃。日本では朝の10時です。ブラジルは日本とちょうど12時間遅れの時差があります。

こちらはホテルのあまり明るくない部屋の灯りのもとで「コンバンワ」。でも相手から戻ってくるあいさつは「オハヨウゴザイマス」。しかも、こちらは一日の仕事の疲れでブランデーなど寝酒の時間なのですが、相手は朝の空気を胸いっぱい呼吸、モーニングコーヒーで張り切っているときなんですね。

この時差からくるギャップ！ の戸惑いのことなのです。

“エッ 日本は地球の裏側” だって？

そう、ブラジルといえば、こんなこともありました。位置はちょうど日本の真反対にあります。これをある時、ブラジル人と話をしている「日本の真裏のブラジル」と言ってしまう、ずいぶん反撥されたことがありました。

「何言ってるんだい。ブラジルから見れば日本こそ裏側じゃないか！」と。たしかにその通りですね。円い地球から見れば、どちらが表でどちらが裏かは決められないわけです。

ちなみに、南米で見る世界地図は日本のものとかかなり違っていています。最も一般的な日本の地図・メルカトル図法では、日本が地図のほぼ真ん中にあり、その左側にアジア、ヨーロッパのユーラシア大陸とアフリカ大陸、右側に太平洋をはさんで北米大陸、南米大陸が描かれています。ブラジルなどは右下の端の方にある。

ところが、あちらの地図では、真ん中に北南米大陸が描かれています。ですから、日本の位置はというと、ずっと左上の端、日本の地図でいうイベリア半島の端、世界の外れのような位置になるのです。彼らの言うことも分かるような気がしますよね。

子供のころ聞いたラジオの天気予報では「表日本は晴れますが、裏日本は雪でしょう」と言っていました。皆さん、今は何と言っているかわかりますか？

そう、表日本ではなく太平洋側、裏日本ではなく日本海側ですね。やはりそこに住む人

にとっては「裏」と呼ばれるのはあまり気持ちよくないわけです。なかには山陽地方と山陰地方についても、山陰を山光と呼んだらどうだろう、と提案する人もいます。

ともあれ、この夏には多くの特派員やリポーターがオリンピックの取材でブラジルを訪れると思いますが、東京本社と電話交信する場合には、きっと私と同じような場面に遭遇するのではないかと推測しているところです。

「赤道」クイズ・・・地球をまたぐ

ここでクイズをしてみましょう。これは中学校の総合学習の授業の際に生徒によく聞いてみる質問です。人生経験の豊かな皆様にこんなことを聞くと失礼に当たるかもしれませんが・・・

地球儀または世界地図に描かれている「赤道」の正しい定義は次の4つのどれでしょうか？

- ①「地球上に引かれている赤い線」
- ②「地球上の最も暑い点のつながり」
- ③「地球の横腹を一周し北半球と南半球に二分する線」
- ④「地心を通して自転軸に垂直な平面が地表に交わる大円」

< 2度読み上げ、各々を解説、正否を確かめていく >

3番、4番は一応、正しいといえるでしょう。でも2番は異論が出てきて、必ずしもそうではない、さらに1番ともなると論外ですね。

エクアドルに行った時<実は国名の「エクアドル」とはスペイン語で「赤道」の意味なんです>、私はその「赤道標」といわれるものを訪れました。首都キト市の郊外へ車で小1時間。荒涼とした秃山のふもとのやや広い台地に、基台の各辺が約8m、高さ15mほどの、先端に向かってやや細くなっていく四角柱が立っていました。その上に直径3mほどの地球儀がのっかっています。

四角柱の各面には、それぞれ[E][O][S][N]との文字が刻まれています。それぞれスペイン語で「東」「西」「南」「北」の頭文字なんですね。

[E]（東）[O]（西）面にあたるコンクリートの地面の真ん中には、幅10cmほどの1本の線がはるか遠く東西に伸びていました。これこそまさに「地球を南北に二分する」という“赤道”なのです。

でも冗談ながら、色は何もついていませんでした。赤色でもなく、地面の汚れと土ばかりでそれは黒色に近くなっていました。私は先に友人から聞いていた指示を思い出し、その線を両足でまたぐと、持っていたカメラを同行の友人に渡し、ポーズをとったのです。友人は破顔一笑。「セニョール・シミズ！とうとう地球をまたぎましたネ」——と。この瞬間、私は地球の南北両半球に足をかけたことになるのだということです。

たいそうなユーモアですが、言われてみるとついそんな気になってしまうから面白いですねえ。もちろん、またいだ両足も大事な股間も、熱さでヤケドをするようなことはありませんでした。

周囲の気温は暑さとは程遠く、摂氏10度前後で肌寒いほど。キトが海拔2800mの高地にあるからです。ここから西に1000キロ行くと、同じエクアドル領のガラパゴス諸島。ここは太平洋の赤道直下で、1年中30度前後の熱帯です。

この赤道の下半分、南半球では四季も反対になります。日本は今、春ですが、南米の

ブラジルやアルゼンチンでは、秋なんですね。

「五つの『あ』の原則」

ところで、これだけ交通や通信の手段が発達しても、それぞれの国の人々の生き方や生活慣習はそんなに変わるものではありません。

新幹線が10分か15分おきに正確にピタリと発着する。都内の通勤電車も2～3分おきに入ってくる。少しでも遅れると皆イライラし出すという日本です。

それに比べ、私の駐在していたパナマではそうした問題はありませんでした。それは日本のような電車がなかったからです（運河鉄道があり最近ではパナマ市に地下鉄ができた）。小さな国なので近場へは自動車かバスで、国外へは飛行機が一般的でした。分、秒を争う時間正確な日本の競争社会から、何事においてもゆったりとしたリズムのラテン・アメリカ（中南米）に赴任したばかり、ずいぶんイライラしたものでした。

向こうは何事も「アスタ・マニャーナ」でよいのです。これはスペイン語で「あしたまた」「あしたまで」という意味ですが、5時または6時になると、仕事が途中で、店にお客さんがいても「アスタ・マニャーナ」で帰ってしまう。仕事の約束の期限が守られなくても「アスタ・マニャーナ」。それよりも自分の生活を大切にしているんですね。

パナマでも、夜遅くまでオフィスに電気のついているのは、大部分が日系の駐在企業でした。もっとも、先ほど申し上げた時差の関係、ということもあり得ます。パナマと日本の時差は14時間。東京本社が昼間の時間に上司と連絡を取るためには、向こうは夜の時間に電話をしなければならないわけです。

ところがパナマ人は、社員のみならず役員も、官庁の局長クラスの幹部職員も、定時には殆ど帰ってしまっているのです。

私も、「これこれ、しかじかの取材をいつまでに」との指示を東京本社から受け、一生懸命取り組むのですが、なにせ相手のあることです。はかどらない交渉と仕事にとうとう「五つの『あ』の原則」を編み上げたのです。

<ボードへ転記>

「あせらず」「あわてず」「あくせくせず」「あてにせず」それでも「決してあきらめず」

――。

この「五つの『あ』の原則」を心にとどめている限り、それほどイライラすることもなくなってきました。海外ではまさに“郷に入ったら郷に従え”が大事なんですね。

「日本に行ったら日本人だらけだった！」

もう一つの大きな特徴は人種の混交です。

よく、ニューヨークは“人種の坩堝（るつぼ）”と言われていますが、首都のパナマシティも同じです。ある時、日本での研修会に参加したパナマ人が帰国するなり言ってきました。

「S rシミズ（Mrシミズ）、日本での研修会は素晴らしかった。大勢の仲間にも会うことができ、あのシンカンセンにも乗ることができた。日本人は本当に親切で感激しま

した。充実した日本滞在だった。でも、とっても驚いたことが一つあったんですよ。それは、日本に行ったら日本人だらけですネ」と。

先住民のインディオ（インディアン）と、新大陸の発見以来、ヨーロッパからやってきた白人、それにパナマ運河の建設時に労働者として入った黒人や中国人。その子孫。そしてその混血。またその混血……。極端な言い方をすれば、100人集まれば、100人の肌の色が違うパナマからすれば、彼の発言もうなずけるような気がします。

もっとも、日本も近年は、いろんな国の人が東京にまた地方にも住むようになり、状況はかなり変わりつつありますが・・・・・・。

世界で語られている日本人についてのジョーク

海に囲まれた、世界の中でも特異な存在である日本と日本人についてこんな小咄も流布しています。

ここでまた質問です。

「ある日、大洋を航海していた船が事故で沈没してしまいました。海に放り出された乗客は、遠くに見える島に向かって泳ぎだしました。その中のたった3人だけ、この小さな島に泳ぎ着くことができた。若い男2人と女1人でした。さて、この男2人は女1人をめぐってどんな行動をとったのでしょうか？」

答えは次の通りです。

フランス人：1人は彼女の夫に、もう1人は彼女の愛人になりました（フランスでは大統領でさえもこれに似たケースはありますね）。

イギリス人：なんと2人は、彼女を放っておいて、自分たち2人で愛し合い始めたのです。

イタリア人：2人は彼女を自分が手に入れようと、決闘を始めました。

では日本人はどうしたのでしょうか？

日本人：2人は、島のどこかに電話がないかとあわてて探しに出かけました。本社に電話して、上司の指示を仰ごうとしたのです。

——この小咄、日本人の行動形態の特徴をよく表わしていると思いますよね。

（携帯電話を世界中に持ち歩く現代ではちょっと状況が変わりますが、あくまでジョークなのです）

もう一つ、同じようなよく知られたタイタニックのジョークがあります。多分、この会場にも知っていらっしゃる方もいるかと思いますが・・・・・・。

<ジェスチャー大きく>

「いよいよ沈没しかけた船から、男も女も我先にと救命ボートへ避難しようとした。大混乱になろうとしている現場で、婦人子供を優先させようとして船長が説得を試みまず」

まずアメリカ人男性に：「キミはヒーローになりたくないか！」（解説）「勇者は沈みぬ」

イギリス人男性に：「あなたは模範的なジェントルマンだ！」（〃）

ドイツ人男性には：「君の国の法律ではそうなっているよ」（〃）

そして日本人男性には：「皆がそうするからあなたもそうした方がいいと思いますよ」

このように、日本人は、まず周りに合わせようとするんですね。周囲の目を気にし、

突出することを恐れ、横並びを好み、他人のするように自分もする、という傾向を持っている。日本人は、他人の目を気にしすぎるように思います。

日本人の国際性は？

ここで日本人の国際性に関してメキシコで見た、少々残念な光景をご紹介します。

夕方のメキシコ・シティのレストランでのことでした。50席以上を収容の広い部屋の一角では、テーブルをつなぎ合わせ15人ほどの日本人観光客が座っていました。すべて男性です。

どうも昼間は名勝のテオティワカンのピラミッドと舟遊びで有名なソチミルコを訪れたようです。やや興奮気味でその印象を語り合っていました。お土産用のソンプレロ（つばの広いメキシコ独特の帽子）がテーブルの片隅に山と積まれています。

と、一人が手を挙げ、大声でウェイトレスを呼んだのです。

「ネーチャン！」

はっきりとした、しかもやや卑俗な印象を与える日本語です。近づいてきたウェイトレスに、今度はこのグループの通訳らしい日本人男性がスペイン語で勢いよくまくしたてたのです。

「一体どのくらい待たせるんかね。もう注文してから30分もたつんだけどサ！」

周囲が再びこれに雷同して、日本語でガヤガヤ騒ぎ始めました。ウェイトレスはその日本語が感覚的にわかったかどうか、スペイン語で通訳の男性に何かを説明すると奥に消えていきました。

ようやく料理が出てきました。テキーラも十分にまわったらしく、興に乗ったそのグループは、今度は大声で日本の歌をうたい始めました。レストラン内には家族連れのメキシコ人、またアメリカやヨーロッパから訪れた夫婦連れの観光客が静かに懇談しながら食事をしています。なかには、明らかにイライラを抑えている感じの客もいました。

たぶんテキーラの程よいまわりが、旅の開放感に拍車をかけているのでしょう。あるいは異国での新体験の連続に感激し、その一方でホームシック的な心情が日本の歌を高吟させたのかもしれませんが。でもこれが仮に一人だったらこうした光景は決して起こらなかったでしょう。元来が外では引っ込み思案の傾向が強い日本人のことです。ただそれが団体となったとき「ミンナデスレバ、コワクナイ」心理が働いてくるのです。そこには日本人特有の群れ歩きや、自主性のなさが反映しているともいえます。

まして男性のみという欧米の感覚からしたら、やや異常な旅行団の性格も原因となっていたのでしょう。そもそもラテン・アメリカを訪れたら、ラテン・アメリカの風習を尊重するのが自然の姿でしょう。“郷に入ったら郷に従え”。「アスタ・マニャーナ（明日また）」のリズムの国で、注文の品がまだ来ない、とセカセカする方のギアの回転を調整しなくてはいけない。ここでは、時間をかけてゆっくりと食事時の懇談を楽しむのが本来の姿なのです。

ところが、大型ジェット機のごう音とともに、元気いっぱい“効率の国”から着いた日本人は、寸分を惜しんで疾風の如く観光地を駆け抜け、カメラのシャッターを押しまくっていく。そして札びらを切って観光地の土産品を買い占めていくのです。しかも経済的な優越感が、ときに現地の人々の眉をしかめさせる言動へとつながったりします。もともと

が親日的なメキシコのこと。ひょっとしたらあのレストランの中には日本語を理解するメキシコ人もいたかもしれません。となれば、ウェートレスの心の奥まで思いやれる人間性が欲しかった。

日本から一歩足を踏み出したら、実はこちらが“外国人”なのです。ちょうど日本国内で、私たちがガイジンまたは外国人観光団を見つめるように、国外での言動のすべてが“日本人は・・・”と現地の人々の目に映っていることをまずは銘記することが大事だと思うのです。

第2部 定年留学、世界文学紀行でのエピソードから

高校時代からの夢を実現

ラテン・アメリカに10年間駐在、各国を訪ねて感じたこと、それは、これらの地の文化の原点はすべてスペインにある、ということでした（ブラジルのみポルトガル）。1492年、コロンブスが新大陸に到着して以来カトリックを軸にしたヨーロッパ文化が入っていったのです。そこで、私はいつかはスペインに行き、その原点を探りたい、特にその文学の原点ともいべき「ドン・キホーテ」を究めてみたい、との夢を抱いていました。

2001年に定年となった私はその夢を実現、スペインの地中海岸コスタ・デル・ソル(太陽海岸)にあるマラガ大学に留学しました。

もう50年以上も前、私の田舎の高校時代には、留学なんて夢のまた夢、都会の超優秀生がフルブライト奨学金を利用した留学ができる、といった話を聞いたのみでした。1ドル360円。それも自由に外貨が手に入らない時代でした。あれから日本と世界の環境は変わり、今は1ドル110円前後。“国際化”の波に乗って、誰でも海外に行ける時代です。

留学——こんなよいものは若者だけに許しておくことはないでしょう。これまで家族を支えるために必死で働いてきた父親族も、少し人生を振り返る余裕のできた定年後に、若い時代にできなかった夢を実現しようと考えても責められる理由はないだろう、ということで、第二の人生を歩み始めたのでした。

担当教師をファーストネームで呼ぶ

そこで、留学したマラガ大学で体験・見聞をしたエピソードのいくつかをご紹介しますと思います。

私が留学していたクラスには多彩な民族、国籍、年齢の学生が集っていました。スウェーデン、ノルウェー、デンマークといった北欧の国、ドイツ、イギリス、フランス、エストニアなどのヨーロッパの国々を中心に、アメリカ、アジアの国々、それにアフリカからも来ていました。その仲間たちが教室ではすべてファーストネームで呼び合います。教師もクラスメートもみんなこの歳をとった私のことを「タケン」と呼ぶのです。教師に対し、自分たち生徒も「ラウラ」（文法担当）、「ラファエル」（会話担当）とファーストネームで呼んだものです。

英語圏でもこの傾向はほぼ同じですが、スペイン語自体の構造からも文化の違いが浮き彫りになっていますね。

スペイン語は動詞の活用が難しいですが、日本人にとって発音は英語などよりも易しいです。「アエイオウ」の母音が同じだからです。

その一方で、日本語はマスターするのに大変に難しい言語だと思います。理由の一つは文字。ご存知のように日本語の文字には3種類ありますね。ひらがな、カタカナ、漢字です。ひらがな、カタカナともに48字ですが、漢字となると、ふつうに社会生活をするために知っておく文字は2000字近くになります。外国人がこれらの文字を記憶するには、大変な努力と時間が必要なのです。（「日本人だっておんなじだ！！」と言う方もいるかもしれませんがね）

以下はマラガ大学のクラスで私が日本語について研究発表した一部です。

——まず、日本語では自分自身を表現するのにも、10近くの言い方があります。（黒板に書く → 参加者に他の例を聞く）

私（わたくし）、私（わたし）、僕、俺、我、内（うち）、手前、小生、等々。

「わたくし」はより丁寧で上質の表現です。「わたし」は比較的丁寧な表現で、最も一般的に使われていますね。

「僕」「俺」「我」とも男性が使用。このうち「僕」はより口語的で、「俺」はやや丁寧さを欠き、「我」はやや古い表現です。「内」は両性によって使われます。「手前」はへりくだった古い表現。「小生」は主に手紙や書き物の中で、やはり、へりくだった表現として使われますね。日本の社会で大切なのは「謙譲」の心です。これをわきまえないと、まわりから「あいつは傲慢だ。頭が高い」と言われかねないのです。

スペイン語では、自分を表現する言葉は「Yo」の一つだけです。英語でも同じ「I」だけですね？ もちろん、動詞の使い方によって、丁寧の度合いを変えていくことがあります。でも、日本語の尊敬語、丁寧語、謙譲語ほどの複雑さではないと思います。こうした日本語の複雑さと難しさについての発表でした。

クラス仲間を我が家に招待

9月末、夏季コースの最終日。授業の終了後、大学近くのカフェテリアで茶話会が持たれました。このコースを最後に母国に帰る受講生が何人かいたからです。話題が日本食談義まで広がっているうちに、いつの間にか、みんなを我が家に招待、日本食を食べさせてあげる方向へと展開していました。

私にとって彼（女）らは、年齢的に自分の息子や娘のようなものです。わが娘も、かつてメキシコのグアナファト大学に留学したことがある。そのときに周囲のいろんな人に、何かとお世話になったかもしれない。そう思えば、遠く母国を離れて学ぶ彼らに、若干でも激励になれば、恩返しというほどの大げさなものではないけれど、地球上のどこにいても“お互いさま”じゃないかとの思いもあったからです。

それに、私は定年になってからすぐにクッキングスクールに1年間通っていました。そこで十八番となっている中華料理を2品、妻は鳥のから揚げ等の洋食2品、それに、みんなが食べてみたい、と言っていた握りずしを用意しました。

幸いにスペインは、カナリア諸島近海の良質なマグロを日本にも輸出している国です。スーパーでもときどきスペインマグロが見られますよね。でも値段が結構高い。ところが現地では、近くのスーパーですばらしいマグロのトロが日本の3分の1ほどの値段で安く手に入ったのです。

美人女子大生とのキスと抱擁！

昼食時間はスペインタイムの午後2時に合わせてあります<時間の解説>。準備がほぼできたところへアパートの玄関のベルが鳴りました。私はあわてて、スリッパをやや厚底の靴に履き替えました。小柄な自分が、背の高い彼らに少しでも合わせようとの心と、靴で入ってくる彼らが遠慮しなくていいように、同じものを部屋で履いている必要があったからです。

8人がぞろぞろと我が家に入ってきました。

「ムイ ビエンベニード！ Welcome（ようこそ！）」

私はエプロンを脱いで、玄関に立ち、女性とは一人ひとり両頬にキスし、男性とは力強い握手で来宅を歓迎しました。学校内では、恋人同士でもなければキスすることはありません。でも、スペインで学校をはなれたとき、親しい間柄での最大の歓迎の意を表すのはやはりキスなのです。

キスといっても、唇ではなく、軽く抱き合い両頬を触れ合うだけのもの。これをしないと却って歓迎の意が弱く、堅苦しい雰囲気になるからなのです。

とはいえ、金髪の美人女子大生とのキスは、瞬間的でも心をときめかすものがあります。妻も同じように全員と、しかも男子学生ともキスしているわけだから、こちらも問題ありません。還暦を超えて、若い外国人女性と頬を触れ合わせられるのも、スペインという文化風土にいるからこそ、といえるのかもしれない。

文学紀行のエピソードから

ここでスペインからヨーロッパ全体に少し目を広げてみましょう。留学が終わると私は世界文学紀行を始めました。第一作目はセルバンテスの『ドン・キホーテ』。以後、『風と共に去りぬ』（アメリカ）『赤毛のアン』（カナダ）『ロミオとジュリエット』『ベニス商人』（イタリア）『ハムレット』（デンマーク）『ファースト』『車輪の下』（ドイツ）、アンデルセン童話、グリム童話（それぞれデンマークとドイツ）、『戦争と平和』『罪と罰』（ロシア）、『レ・ミゼラブル』『三銃士』（フランス）と現在までに15作品にいたっていますが、すべてをご紹介する時間もないので、3年前、出版150周年で訪れたヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』に関係するお話をします。

（レジュメに「カルメンの舞台を訪ねてみたが」と「ハポンの姓を持つスペイン人」とありますが、ちょっと時間がなくなってきましたので、申し訳ありませんが今回は略させていただきます）

「ああ、抱けなかったマドモアゼル！」

3年ほど前にイギリス映画「レ・ミゼラブル」が国内の各地で上映されました。その年の夏、私は『レ・ミゼラブル』と『三銃士』の舞台の取材のためにパリを訪れました。以下はその時に綴ったエッセイ（夢物語）です。

パリに到着した最初の日の午後5時ころ、少し時間があったのでオペラ座で公演中の舞台を観賞することにしました。劇場はパリのほぼ中心にあります。

急な思い付きだったので予約席券はありません。入り口で自由席券（100ユーロ、約13,000円）を買うと、空いていると思われる席のところに行きました。隣の席には若くて美しいフランス女性が座っています。そこで私は英語で尋ねました。

“May I take this seat?” (お隣に座ってもよろしいですか?)

彼女も私の英語がわかっただけでなく “Sure, of course” (ええ、どうぞ) とニコリとうなずきました。フランスでは意外に英語のできる人が少ない。英語ができてても自国語<フランス語>への誇りから話そうとしない人もいます。

親しみを感じた私はこの機会に、これから訪問しようとする二つのフランス人作家の作品の舞台や場所について相談しようと思い話しかけました。「ジャンバルジャンがコゼットの恋人、内戦で傷ついたマリウスを背負って逃げた下水道はどこだったのか」聞いたかった。と、彼女は言ったのです。

「もうすぐ幕が開くから時間がありませんね。あなたの訪れようとする作品については私もある程度は知っていますから参考になるお話をできるかもしれません。よかったら自宅にいらっしやいませんか。家はここからそんなに遠くありませんから」

“なんとラッキーな！”

私はオペラ座を出ると胸を躍らせながら彼女のあとについていきました。確かに家はすぐ近く、瀟洒なマンションの3階でした。「よろしかったらどうぞ」。部屋に入ると彼女は親切にもワインを差し出してくれ、言ったのです。

「ゴメンナサイ。少し汗をかいてしまったからちょっとシャワーを浴びさせてね」

そう言う彼女がバスルームに入っていきました。部屋にひとり残った私はワインを口にしながら彼女の出てくるのを待っていました。10分ほどして彼女がバスルームから出てきました。

と、なんとという驚き！！

彼女はうすいピンク色のネグリジェをまとっただけなのです。スレンダーな美しい身体が透き通って見えてきます。私はショックでどこに目をやってよいかわからず、ソファに座ったまま動きがとれずにいました。

と、彼女はぐんぐん私に向かって歩いてくると両手を広げたのです。私をハグしようとしているのです。

「ここで応えなければニッポン男児の名が捨たる」。私は彼女のあまりの美しさに見とれ我を忘れたように立ち上がると、思いっきり彼女を抱きしめようと両手を広げました。ところが・・・

——その瞬間、私は夢から目が覚めたのです。時差で朦朧とした目をこすりながら、ホテルのベッドの上で枕を抱いていたのでした。パリと東京には8時間の時差があります。夕方の5時は日本の真夜中の1時になっていたのです。

寝ている間に仕事が進む「魔法のマクラ」

時差の話をつくつてまいりました。ここで私のパソコン生活最前線のエピソードをご紹介します。

ちょうど10年前にホームページを立ち上げ英語とスペイン語のページも設けました。でも、正しい翻訳のためはネイティブチェックが必要です。私も日本に住んでいる外国人の友人もいますが皆忙しい。それにチェック料金も取られるかもしれない。そこで特派員時代に知り合った友人の、英語はアメリカに住むKさん、スペイン語はパナマに住むMさんに頼むことにしました。

こうして、翻訳した原稿を夜、メールに添付して送っておくと、時差の関係で向こうは昼間。早いときには翌朝には私のパソコンにチェックされた原稿が戻っています。つまり、こちらが寝ている間に仕事は進んでいるのです。「あんたはいいね。魔法の枕を持っている」なんて友人から揶揄されたこともあります。

更に、世界に事業所を持つグローバルな企業ではこんな芸当もやっつけてのけます。

そこでは、パソコンによる一つの仕事を、インターネットを使い、例えばアメリカのニューヨークから仕事時間が終わるとインドへ送る、インドでは続きの作業をし夕方になると今度はイギリスへ送る、イギリスではまたその続きの作業をして仕事の時間が終わるとアメリカへ投げ返す・・・こうして地球の昼時間を追っかけてその仕事が継続されていく——つまりそれぞれの国の労働者は仕事が終わり眠っていても、リレーされたその作業は24時間どこかの国で続いているのです。1日8時間労働として1日に3倍の作業が進んでいるわけです。

丸い地球の時差を活用！ 時代の最先端のご紹介です。

熟年よ大志を抱け！

世界の文化比較については他にも色々ありますが、時間も迫ってきました。今日ここに参加くださっている皆様は私と同じくらいの年代の方もいらっしゃるようですので、最後に私の定年後の生き方について、ご参考になればと少しだけお話させていただきます。

まず、「定年後はHaving でなくBeing が大事」だと言われています。財産や貯金を持っていること<Having>も大事ですが、今、何をやっているか<Being>が問題。財布にいくら入っているかが問題ではない。心にどんな夢を描いているかが問題だということです。夢が、志が人を創る。大きな夢と志は大きな人生を創ると言われています。

世界で最長寿国の日本。人生80年から90年の時代です。平均でも定年後まだ20年の人生が前途に横たわっています。フランスでは「年金生活」という言葉は、晩年と言うよりも第二の人生、といった前向きな意味合いが強いですね。アメリカ人は、第一線を退くと、いよいよこれからの人生を楽しもうとする。だから、服装や化粧も派手になる。

こうした面からいうと、定年は今やゴールではなく、豊かな可能性をはらんだ次の人生のスタートともいえるでしょう。身体は老いても心まで枯れてはいけません！

札幌農学校校長のクラーク博士は言いました。

Boys, be ambitious! 少年よ大志を抱け！

私はこれをもじって、

Seniors, be ambitious! 熟年よ大志を抱け！

と訴えているところです。

私の大志は、4年後の東京オリンピック・パラリンピックでボランティア通訳として貢献することです。そのため今、英語とスペイン語の再勉強を始めています。

よく定年後は「きょういくときょうようが大事である」と言われます。いえ、今さら勉強しなさい、と言っているわけではありません。「きょう行くところがあるか」「きょう

すべき用事があるか」ということなんですね。確かにその通り。よくぞピッタリの言葉を考え出してくれたものだ、と思います。

やりたいことがあるか、行きたいところがあるか、会いたい人がいるか、ときどき点検をしてみるとよいと思います。お金がたくさんあるから充実した生活が送れるのではない。生きる知恵があつてこそ、希望に燃えた楽しい生活を送ることができるわけです。

世界には経済的なものだけでなく、もっとエキサイティングで大事なことがいっぱいあります。

世界の文化比較から時差についてのエピソード、シニアの生き方へと、話しはあっちこちに飛んでしまいましたが、皆様が何かをお感じになり、今後の人生のヒントとなり、御参考になればこんな嬉しいことはございません。

これをもって私の話は終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。